

The Silver Chair にみられる使命の遂行

岡 田 理 香

Following the Signs in *The Silver Chair*

OKADA Rika

序

『ナルニア国物語』の著者 C. S. ルイスは学生時代に哲学を学び、晩年の作品においても哲学書の影響を見ることができる。中でもプラトンについての言及は多い。

プラトンは世紀の哲学者であるにも関わらず、その考え方や作品は古びることなく、現代に受け継がれている。初期キリスト教への影響において、ユダヤ思想とギリシア哲学を結び付けようとした人物にピロンやアレクサンドリアのクレメンスが存在した。さらにプラトン哲学を中世に持ち越すことに貢献したのは聖アウグスティヌスそしてエドモンド・スペンサーであり、十七世紀にはケンブリッジ・プラトン学派が誕生し、プラトンとキリスト教の相関関係についても取り上げられた。

C. S. ルイスの宗教書においてもプラトンの引用が多く見られる。ルイスはプラトンとキリスト教に相違点があると認めているものの、ルイスの思考と作品にはプラトンのイデア論の世界が介入してきているように思われる。

『ナルニア国物語』の中で *The Silver Chair* にも別世界を示すプラトンの考えが入っているようである。*The Silver Chair* は『ナルニア国物語』の中でも Caspian 三部作の三作目に当たる。*Prince Caspian* で Caspian の幼少時代が描かれ、*The Voyage of the Dawn Treader* で Caspian の王としての航海が扱われている。それに続く *The Silver Chair* を本稿で取り上げるが、行方不明の Caspian の息子を探しに行く話となっている。この作品では、登場人物たちが示された指示に従って行動しようとしながらも失敗を繰り返し、最後には使命を全うする姿が描かれている。

本稿では C. S. ルイスのプラトンの影響を見た上で、*The Silver Chair*に見られる「使命の遂行」というテーマ、さらに『ライオンと魔女』でも見られた「死と甦り」について考察していきたい。

1. C. S. ルイスとプラトン

ルイスはアレゴリーについて論じる中、象徴主義について以下のように述べている。

象徴主義はギリシアからやってきた。ヨーロッパ思想にといてそれが最初に効果的に現われるのは、プラトンの対話においてである。太陽は善の模写である。時間は永遠の動的イメージである。すべての可視的存在は、それらが形相の模倣に成功する限りにおいて存在する。¹

ルイスはプラトンとキリスト教を異なると認めながらも、ケンブリッジ・プラトン学派の一人ヘンリー・モアに興味を抱き、モアの道德観についての著作を読んだ。

ケンブリッジ・プラトン学派は十七世紀に生まれた学派で、プラトンとプロティノスの教えを受け継いだ。プラトンの教えから神の善を人の善とした。

ケンブリッジ・プラトン学派の論議は、人間には神性と道德の概念を発展させる能力が備わっていると示した。人間の機能を単純化できないとし、特別な宗教見解を示したといえる。モアは無神論への反論を掲げていた。十七世紀のプラトン主義者がいう「無神論」とは「唯物論」が主たるものであった。

議論から宗教の複数化が生じてくる中、モアはカルヴィン主義とアルミニウス主義の中間の位置を作り、自由選択で運命を決める間に救いは予定されているとした。Culverwell は異教徒も救われることが可能とした一方、全人類が救われるとさる説を否定した。そして好意的にカルヴィン主義を受け入れ、選びの教義を保持した。Sterry は万人救済主義者であり同時にカルヴィン主義であった。相反するようだが両者に矛盾はないとし、カルヴィン主義の枠の中で救いが成されるとした。彼の考え方においては非キリスト教徒も救われることになる。

一方、モアによると誰も神の贖いにもれる者はいないとし、同時にカトリックを非難し、万人救済主義者ではなかった。モアはカルヴィン主義にもアルミニウスにも万人救済主義者にも分類されない。アルミニウスとカルヴィン主義の混合であった。

こうしてケンブリッジ・プラトン主義は異教徒の救いについて議論を重ねてきたが、それ

¹ ルイス、C. S. 著『愛とアレゴリー』（玉泉八州男訳）、筑摩書房、1972年、44頁。

は宗教の多様性が生じたために生まれたものであった。²

ケンブリッジ・プラトン学派では、プラトンとキリスト教の相関関係についても取り上げられた。ルイスのキリスト教宗教書においてもプラトンの引用は多い。ルイスはプラトンとキリスト教の相違点があると認めながらも、ルイスの思考と作品にはプラトン哲学が介入してきている。

今回取り上げる作品 *The Silver Chair* でも太陽を知らない地下の世界が登場している。次の段階では *The Silver Chair* においてルイスの意図した作品の意味とテーマを探索していくことにする。

2. 任命

Eustace が前作で Narnia を訪れて劇的な変化を見せてから数ヶ月経過している。*The Silver Chair* で主要人物となるのは Eustace と友人 Jill、そして Narnia の住人 Puddleglum である。

この作品では Jill と Eustace が Narnia に行きたいと願い、Aslan のいる場所へ引き寄せられる。そこで、Eustace と Jill がこの世界へ来たのは、Aslan が二人を呼んだからであると Aslan は告げる。二人が Narnia に行きたいと願ったのが先ではなく、Aslan が召し出したことが先である。この状況は聖書における神の先行的恵みであり、神が人間を呼ぶことで人間が救われるという神の主権性を指している。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。(ヨハネの福音書 15:16)

この聖書の言葉は *The Silver Chair* のテーマともなり、彼らは Aslan に任命されて使命を遂行していくことになる。

Aslan は Jill に使命を告げる。それは行方不明となっている Rilian 王子を探し、父 Caspian のもとへ連れて帰るというものであった。探索のために四つのしるべを授ける。第一に Eustace が Narnia に到着後直ちに旧友に会うこと、第二に巨人の都跡に行くこと、第三に石の上の文字を見つけてそれに従うこと、第四に Aslan の名によって願う者にその通りにしてやることであった。

² Harrison, Peter, 'Religion' and the Religions in the English Enlightenment, Cambridge University Press, 1990, pp.19-60.

Jill はその言葉を完全に暗記させられ、常に思い出すよう Aslan に言われる。ここでは Narnia における Aslan の言葉がキリスト教における神の言葉と同じ役割を果たしていることが意味されている。Aslan の勧めは聖書の言葉「私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。」(申命記 6:6-7) との言葉に現わされている。

さらにルイスは他の著作においても、教義を道しるべとしている。

Doctrines are not God: they are only a kind of map. But that map is based on the experience of hundreds of people who really were in touch with God.³

こうして使命を受けたが、最初の使命から失敗する。Eustace が旧友に会うという使命では、Narnia で既に数十年が経過して Caspian も年を重ね、Eustace は彼と気付かないまま Caspian は王子 Rilian を探索する航海に出航してしまった。

Eustace と Jill は王子の行方不明の経緯を聞く。女王と王子が出かけた時、女王は蛇に噛まれて亡くなった。王子は敵討ちにと毎日女王の亡くなった場所へ出向いていたが、そこで緑の衣の女性と会う。王子は彼女に取り憑かれたようになり、ある時出かけたきり帰らなかったものであった。ここで一人悩む姿はハムレットのモチーフが含まれている。

Eustace と Jill は案内人 Puddleglum を得て、第二のしるべ巨人の都跡を目指す。旅の途中、緑の衣を着た女性と騎士に出会う。女性は都 Harfang へ行くことを勧め、そこでは食事やお風呂で歓待してもらえると促す。Puddleglum は反対したものの、Eustace と Jill は食事と入浴を求めて旅を続ける。

この場面では、この世での喜びや楽しみを追求するあまり、人生の本当の目的を失い、授かった使命さえも見失ってしまう人々への警告が示されている。Eustace と Jill は、この世の心づかいのために使命と目的を失いかけていた。ここに改めてキリストがマタイによる福音書 4:4 で引用した旧約聖書申命記 8:3 の「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」という言葉が適応される。物語に表わされているように、使命を見失った者は自らの行く先をも見失うものである。そしてこれに続くエピソードには、迷う者に道が示されることが表わされている。

やがて Eustace と Jill と Puddleglum は溝に行き当たるがそこは行き止まりであった。Puddleglum はそこを調べるべきと言うが、Eustace と Jill が先へ急ぎたいがために通過し、Harfang へたどり着く。彼らは温かく迎えられる。その夜 Aslan が Jill に現われ、使命の言葉を再び言うように促す。Jill が言えずにいると外を見せられる。Harfang の下方には

³ Lewis, C. S., *Mere Christianity*, Harper Collins, 1977, p.136.

Aslan の二つ目のしるべである巨人の都跡があった。そこには UNDER ME という言葉が浮き上がっており、一行が溝に行き当たり Puddleglum が調べるべきだと主張した所であった。Jill は Aslan の二つ目のしるべである「巨人の都跡に行くこと」、三つ目の「文字を見つけてそれに従うこと」を思い出す。Jill はこれらのことを Eustace と Puddleglum に伝える。

この姿には、人間が自己中心的な考えに陥り自らの利益だけを追求していたが、社会的貢献へと立ち戻る様子が平明に描かれている。自らのことだけに気を取られていたことを反省し、神のもとへ立ち帰る改心の姿が描かれているといえよう。さらに人間が間違った方向に向かっている時でさえも Aslan がしたように叱らずに説く姿にも、ルイスの神観が描かれている。

Jill が外に連れ出された時に感じた Aslan の息は、神の息を表わす。旧約聖書では神が人間を創造した時に、神が人間に息を吹きかけた。ここでの Aslan の息もそれと同じ意味を持ち、生命を与えるものとされている。Jill たちは殺されることを Aslan の息により助かったのである。

三人は、巨人たちが自分たちを食べようとしていることを知って逃げ出し、UNDER ME の文字のある場所から地下へ降りた。そこで Jill と Eustace は不安に駆られる。Puddleglum だけが、今しるべに従い Aslan の言う通りに進んでいるから正しい道だと励ます。彼の性質は正しく神の前に忠実な者であり、全知全能者への信頼を見せている。彼の信仰は著者ルイスの表わすキリスト者としての理想の姿の一つとして捉えることができる。

3. 使命の遂行

一行は地底に入り、地底人に連れられて移動する。ここに住む地底人は、プラトンの『国家』第七巻に登場する洞窟の比喩と類似している。プラトンの著作においては、暗闇の洞窟で、奥底の壁に向かって囚人たちが縛り付けられている。上方に火が燃えており、その上をあらゆる種類の物品や像が運ばれ、その影の動きが囚人たちの前の壁面に投影されている。囚人たちはその影を見ることしかできないため、影を現実のものと信じている。Narnia で登場する地底人たちもまた暗闇に住み、地下が彼らの世界の全てであり、外に出ることを望まない。ルイスはプラトンの洞窟の比喩をここで用い、目に見える現実の世界との対比に当てている。

地底人たちに連れられた一行は、以前見かけた騎士に迎えられる。彼は夜中になると気が触れるため銀の椅子に縛り付けられる。Puddleglum、Eustace、Jill は他の者に内緒で彼の乱心を見ようとその場に居合わせる。

夜になるとその騎士は乱心するどころか正気の状態に戻り、そして Aslan の名にかけて縄目を絶ち切って欲しいと請う。Jill たちは四つ目のしるべ「Aslan の名によって願う者にその通りにしてやること」を思い出す。理解できずとも従う信仰を現わし、彼の縄を切る。

すると騎士は銀の椅子に向かって切りつけた。騎士にかかっていた魔法は消え、騎士は自分こそが Rilian 王子であることを明かす。

Rilian は緑の衣の女性に捕えられ、魔法をかけられていたのであった。間もなく彼女が部屋に戻り、Rilian が正気に戻ったことを悟る。彼女は Narnia を支配下に置くことを目的とし、女王を殺して王子を捕らえていたのであった。その目的において、『ライオンと魔女』に登場する魔女と、別人物ではあるものの同じ性質を持っているものである。

緑の衣の女性は香を焚いて楽器を奏で、催眠術をかけようとする。彼女は優しい声で Narnia や太陽、Aslan を否定していく。太陽はプラトンに「善のアイデア」とされているがゆえに、ここでもルイスはプラトンのアイデア論を用いていると思われる。魔女により皆は思考力を失い、魔女の言うことに従うようになっていく。悪魔の誘惑について、ルイスは『悪魔の手紙』の中でスクルーティブにこう言わせている。

もし罪の集積的効果によって人を光から漸次遠ざけ、虚無の中にじりじりつれこむなら、罪はどんなに小さくても構わない。もしトランプで事がすむなら、殺人もトランプと選ぶところない。まこと地獄への最も確実な道はなだらかな道である——ゆるやかな勾配、やわらかな足ざわり、急な曲り角もなく、里程標もなく、道しるべもない道である。⁴

さらに悪の誘惑から脱出するために必要なものは「苦痛」であると作者は考える。Puddleglum だけは魔女に反論し、自分の足に火傷を負いながら足で香の火を踏み消す。そして I'm on Aslan's side even if there isn't any Aslan to lead it という。この言葉は作者自身の考えを述べているものであるとされる。

これはルイス自身の考え方であり、世界の事物の存在を否定するのではなく、私たちの考える観念の世界は、別世界にある実体と存在の影である、つまりわたしたちが頭で考えることは、その実体が別世界にある、という意味である。⁵

また「懐疑論者へつきつける作者の返答でもある」ともされている。⁶ さらにこの場面はダニエル書3章にも繋がりを見せる。ダニエル書において、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人は、王の像を礼拝しなかったために捕らえられ、火の炉に入れられる。その時彼らは神に信頼をおき、助け出してくださいと信じ、もしそうでなくとも決して金の像を拜まないことを告げる。(ダニエル書3:8-30) 三人は神の力により、火から助け出される。

⁴ ルイス、C. S. 著『悪魔の手紙』(森安綾、蜂谷昭雄訳)、新教出版社、1995年、85頁。

⁵ 柳生望『ナルニアの国は遠くない』新教出版社、1981年、127頁。

⁶ 小林真知子『C・S・ルイス: 霊(ブネウマ)の創作世界』彩流社、2010、25頁。

川崎佳代子「C.S.ルイス『銀の椅子』に関する一考察」神戸山手女子短期大学紀要、1989年、Vol.32、40頁。

この話と同様に Narnia で Puddleglum も火を消すことで悪に打ち勝つ。ダニエル書の場面と類似しているため、この話が作者の念頭にあったのではないだろうか。

Puddleglum の反論に魔女は正体を表わし、王子に襲いかかる。彼らは蛇となった魔女の首を切り落とした。こうして母の仇を取った Rilian 王子は地底人たちを解放した。

彼らが暗闇の地底を進む中、Rilian は “Whether we live or die Aslan will be our good lord.” と言う。これはパウロの言葉「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」(ピリピ人への手紙 1:21) に相違している。やがて一行は Narnia に帰り、航海に出ていた Caspian も Narnia に帰国する。Caspian は Rilian と再会し、祝福し、長寿を全うしてその場で亡くなる。続く章で Caspian の復活が描かれている。

4. 死と甦り

死からの復活については、『ライオンと魔女』で Aslan が甦ることで、既にキリストの命の再生を示しており、*The Silver Chair* においても新しい命が描かれている。

Jill たちが Narnia を去る時が訪れ、Jill は Puddleglum を “as brave as a lion” と誉める。これは *Prince Caspian* でも Lucy を励ます際に出て来た表現 lioness と類似し、Lion つまり Aslan を示し、神聖な存在であることを意味している。Aslan は Jill たちに現われ、Jill が過ちを詫びようとするところを彼女の労をねぎらう。

Think of that no more. I will not always be scolding. You have done the work for which I sent you into Narnia.

これは聖書のタラントの話で、主人の労いの言葉を表わす。

よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。(マタイの福音書 25:21)

自分の才能、賜物を活かして勤めを果たした下僕を Aslan は労った。神もまた人間にそれぞれ使命とタラントを与え、それを果たすことを望んでいるとルイスは考える。

私たちの人生の主たる目的は、“一個人としての自分の人生”の終着点に到達することです。人はこの意味で“死ぬ”のです。すなわち、死んで“ゼロ”となり、自分の自由と独立を手放さなければなりません。「わたしの内に宿るのは、わたしではなく、キリストである」(ガラテヤ 2:20)⁷

⁷ ルイス、C. S. 著、クライド・S・キルビー編、『永遠の腕（かいな）のもとに：アメリカの一女性に宛てた手紙』（小峰三和子訳）、新教出版社、2010年、163頁。

任命され、使命を遂行する姿を描いた *The Silver Chair* は、ルイスの提示する人生の目的の雛形なのである。

Jill と Eustace は Aslan の国へ上げられ、亡くなった Caspian の体を見る。Aslan はそこで、かつてキリストも友ラザロの死を知って涙を流したように、Aslan も Caspian を見て涙を流す。Aslan はいばらで自分の前足の裏を刺すように Eustace に命ずる。Aslan は血を流し、その血により Caspian は甦る。これはキリストが人によって苦しみを受け、いばらの冠をかぶせられ、血を流した十字架の救いを表わしている。キリストの死と復活により人も救われるということを Caspian の甦りによってルイスは示しているのである。

5. おわりに

物語の最後では、Jill と Eustace は Aslan から息を受け、人間界に帰る。Aslan のおかげで学校生活も改善をみることとなる。

この作品はルイスの信仰に基づき、神が人間に与える使命と、聖書の言葉をたくわえておく大切さ、そして人間が神の使命を果たすのも神の力によることを表わしている。悪に打ち勝つことが、神の使命を遂行する上での最大の難関である。それには試練や誘惑を伴い、神の助けを必要とするものである。この難関を超えた時にこそ神の祝福がある。ルイスはこのような自らの信仰を土台とし、人生を一つの旅とみなしてこの物語を書いた。さらに人間の死と復活をも扱っていて、ここに初めて登場した Aslan の国は *The Last Battle* において重要な場所となっていく。

Caspian 三部作に見られた「不信との戦い」、「罪の悔い改め」、「使命の遂行」、これら三つのテーマは神から人間に課せられたものであり、人間の善と神の力によって成就するものであると表わしている。ルイスはその信仰により、神の言葉に従い、全ては神のもと UNDER HIM⁸ にあることを、この作品によって現したのである。

(おかだ りか 本学非常勤講師)

⁸ Schakel, Peter J., *Reading with The Heart: The Way into Narnia*, William B. Eerdmans, 1979, p.80.